「おたがひに苦勞致す。もはや　恐るべき武士ありとも覺えざるが　長い先陣の途中　我等少からず疲れ申した。」

「ご同樣。まづもつて安心。赤松殿の佐用の莊は　いさゝか用心堅固に構へ申したが　赤松殿へは鎌倉から　恩賞の轡を飼はれて　ともかく面倒なくて仕合。あの時一戰仕らば　或は我等負けかも知れず　車駕を奪はれては　天下の一大事もう雲州三尾の關までは　無事に著き申さう。」

「聞けば備前の兒島三郎　手勢を具して船阪峠に待ち申したとか　備前備中備後は少と恐しい國　櫻山茲俊の謀叛もあつたのを　わざ〳〵御順路を備前へと言ひ觸らし　反つて杉阪から作州の道を探られて　三郎なんごを欺かれた策略　感心申す。」

入道　身を反してから〳〵と笑ひ

「敵を僞る兵法はこゝでこそ。三郎なご　聞き申さぬ小冠者　たゞ蹄にかけて驅け散らすまでなれご　小勢といへごも戰はずして勝つが名將と申すもの。三郎とやら　何故杉阪へ伏勢を配りおきまをさなかつたか。」

「其處は三郎の知行所を遠く離れ居り申すと　一つは　それまでの手勢もなき小身者。だが油斷なきやう。」

「さらば。」警固の二將は得々と相別れて行く。

二

櫻咲いて　春も三月半といへご　作州の山鄕嵐寒く　夜は寂々と更けて行く。

待てごも〳〵　船阪峠に車駕來ませず　人を四方に馳せて聞けば　すでに三日月佐用を經て　杉阪より美作に入らせたまひきと。己んぬるかな。すなはち　勇み逸つた一族一門の殿原を兒島に還し　御跡を慕ひまゐらせて洩れうけたまはれば　上樣　ならはせたまはぬ御旅路の爲か　しばらく雲清寺にて休らはせたまう。御惱ゝと。

天に號ばんとして聲あるべからず　地に訴へんとして詞あるべからず　一片の丹心　いかにしてか雲の上に白すべき。書は匿れ　夜は忍び　幾日幾夜悶え煩ひ　今日こそはと　三郎　行在の御垣を窺ひたてまつる。

おぼろの月影地を照す。冠つた笠をしづかに脱ぎ　著けた蓑をばそつと拂ひ　具

足の音にも心して　木蔭の闇に拜しまつれば　假の宮居の御軒端も近く　其處に一人の衛士もなし。あゝ　十善の大君　いかなる御夢にや入らせたまうらん。畏けれども　いとせめて　玉の御咳をもと耳を立て　冷なる地に伏して　涙流るまゝに拂ひもやらず。

微臣　今夜　外處ながら伺候しまゐらす　天運開かせたまうも遠からじ　と。

月はやうやく上つて　樹影御階の砌にぞ移る。

このまゝ　ふたゝび罷るもをしく　つと　起つて　一刀　二刀　小楯に寄り添う幹を白れば　雨より滋くはら〳〵と濺いで　若き武夫を飾る滿身の錦は　落花の雨とも心づかず　卽座に思ひ浮べしまゝを筆に

天莫空勾踐
時非無范蠡

三

明日朝　上様見そなはすや否やは知らず。ふたゝび地上に額づいて　限りなき御威徳を戴きまつれば　志士慷慨の壯心　陣々としてます〳〵堅し。

たちまち聞く　上様籠らせたまうらん大殿の奥の方より　比へば仲秋の野の蟲のやうに　涼しき玉の御鈴の響　一聲　また一聲の餘韻かすかなるを。さては　なほやすらはでおはしますかと　拜しまつれば　彼方の妻戸音なく開かれて　ほの暗き一道の光明地に射し來る。

始終　泉石の蔭より　三郎が細かなる一擧一動を窺つて居たのは　隠岐の小島へまで供奉の人　笠置の潛幸このかた　常侍艱難を御供に仕へた少將忠顯　白き狩衣の姿しのびやかに　開かれた妻戸の方に參つて　御階の下に伏したてまつれば　やがて三位のお局にやおはすらん　女房の奉げまつる紙燭の光に立たせらるゝは　白練緯の内衣に　紅の單衣　紅の袴　五つ衣の袖高き欄に流れて　葡萄染の唐衣　水色の長き裳を曳かせられつゝ　仰げば綠の寶髻に釵子燐めく。

何事のおはしましてか　何事をも仰せられず　手づから一卷の御寶を　少將忠顯に授けたまへば　忠顯また一語もなく　謹み　畏こみ　歩み寄つて　三郎が垂れた首の上より下し賜ふ。

ふた〻び見上げ申せば　御局の神々しき姿は消えて　妻戸の光明また洩れず。少將忠顯　林泉の彼方に歩み去る。

四

何處の里にか雞鳴いて　感激の夜はやうやく曉方に近からうとする。驚けば　警固の武士が擊拆の音も響く。

手早く　蓑著て　笠著て　立ち出ると　何時の間にか櫻姫　紫　裾濃の鎧のすがたに　御垣の外に　跪く。

「や　何者ぞ。」

「くせもの數夕忍び入つたり。」

「皆々出で會へ　一大事。」

五六の雜兵ばら〳〵と躍りかゝるを　三郎その一人二人を投げ退け突き退け　姫また右に左に擊ち倒して　朧の闇に落ちて行く。

◆……

3　佐越の雷雨……範長戰死

一

北條滅びて　公家一統の御代太平を謳う間もなく　尊氏叛して世はふた〻び亂麻

建武中興の御偉業はかなくも　覆り畢らんとする。

延元元年五月十九日。

播州佐越の浦の片邊　阿彌陀寺と呼ぶ古寺の山門に　驕る白馬の金鞍ゆたかに乘りつけたのは　自ら播磨守護職と號する赤松圓心　二三の從兵を縱つて老僧を引き出し。

「住寺　屹度うけたまはれ。」

老僧地上に蹲れば

「この度の合戰我等大勝利　備前福山の城は昨日　足利下御所の手に攻め落して大將大江田式部も討ち取つたぞ　その生捕討死の首數一千三百五十三　三石城に立て籠つた脇屋右衛門佐も追ひ散らし　さすがの總大將新田左中將義貞殿も我等が白旗城の寄手を解いて　おめ〳〵加古川まで引き退つた。久しく十重二十重に圍まれて居た我等びくともするものでなく　足利大御所將軍の威光を頂き　もはや九州　四國　中國　靡かぬ草木もない中に　兒島の備後範長　同苗三郎高德ばかり　前には新田殿と諜し合せて　船阪を參ひ　三石を取り　福山にまで勢を張つたが　斯くなりはて〻は我等の馬前に　弓を折り矢を拾て〻も降參すべきに熊山に敗け　西川尻に破れても　なほ剛情に暴れ狂うて　兜を脱いで參らうともせず　世にたはけた痴れ者。もはや袋の鼠の逃げ場もなければ　新田脇屋の後を追うて　程なくこの佐越邊へ落ち來るはず。見付け次第に訴へ出て　厚き恩賞に與るべく　この儀違背に及はゞ　老僧　たちまち命はなかるべきぞ。」

二

圓心去つて　青葉の古寺もとのまゝ靜に　老僧が木魚の音　讀經の聲　ふたゝび

本堂に響くころ　備前西川尻の敗戰より遁れて　熊山　片上　日生　福浦　わずかにこの佐越にまで　路々追擊の士兵と鬪ひながら　落ち延びた備後守範長　滿身創痍　具足の上まで淋漓の血潮。

「賴まうぞ。」

本堂の階に身を下せば　老僧驚いて迎へ出で　大童の範長が戰う手を握り。

「備後殿　とお見受け申す。」

「ご住寺　さて〳〵久し振り　變らず恙もなうおはしたか。」

「かたじけなう存じ申す。が　あまりにお傷はしい姿　今も今　圓心法師が訪ねられて　備後殿が落ちられたなら　訴へ申して勸賞を望めと。」

「ご住寺。備後が細首打ち取つて　勸賞所望はお心のまゝに。だが　子息三郎高

德　我等よりもなほ重き深傷　今亡き者とするはいかにも惜しく　負傷平癒の後上樣御用うけたまはらせたし。我等が首の代として　日比の誼　三郎をばお匿ひ下さるやう賴み申す。」

「やれ勿體なや　備後殿　ご父子とも〳〵　老僧が命にかけて匿まひ申さう。」

「天下無事の日は沙汰もいたさず　兵馬の日には斯のとほり。ご住寺　許させられよ。まづ　水一碗　所望申す。」

雛僧が奉ぐる一碗を　範長一氣に飲み干し

「ご住寺　すでに知らせらるゝとほり　この春一月　郁の合戰に足利殿大敗。九州まで落ち延びられ　二月　左近衛中將新田殿　山陰山陽十六個國の管領として足利殿　追伐の勅命を畏まれしが　しばらく瘧の病　それも平癒の後　當國加古

川まで下られると　白旗城の赤松圓心　軍勢を構へて道を遮り　願はくは　播磨守護職を賜はるやう　さすれば急ぎ御軍の先鋒をうけたまはり　足利殿追伐に馳せ参らうと　斯様に申す。さて〳〵恩賞強請の鄙しき法師。面倒千萬とは存ぜられながら　朝敵追討の道中　無益な殺生を好まれざる新田殿　いそぎ都に綸旨のほごを奏聞せらるゝと　その間に兵糧弓矢の準備から　大手搦手の構築を整へた圓心法師　にはかに矛を逆に　鬼畜の形相を見はし申して　播磨守護職はすでに　足利大御所より被官仕る　綸旨も今は無用のことゝ。されども城は要害堅き白旗苔縄　容易に落つべき勝利も見えず。この時子息三郎高徳　一族一門の手勢を率ゐ　吾等とともに熊山に籠つて　にはかに義旗を翻し申すと　船阪の賊徒はと〳〵く我等を攻め集り申す。こゝぞと　新田殿采配の下に　大江田式部　脇

屋左衛門佐　一舉に船阪の要害を攻め落し　勢に乗じて　三石　福山まで奪ひ取り　圓心法師は孤城落日　間もなく降人に出づべき時　足利殿の大軍九州より攻め上つて　福山　三石ともに我等の敗軍　足利下御所と呼ばるゝ直義は　鞆の津から山陽道を　大御所と呼ばるゝ尊氏は　幾千艘の兵船を以て　もはや備前の吹上に著き申したと聞く。この際我等の討死少しも殘念に候はぬが　熊山の戰に子息三郎　群る賊徒を引き受けての太刀打　五騎　六騎　遂には數も知られず斬つて落し申したが　首筋の傷と　蹄でやられた胸板の深傷　今に難儀申して　ことまで参るにも幾度の落馬　ご住寺　お頼み申す。」

三

熊山城頭の白兵戰に　受けた太刀傷蹄傷と　今日しば〳〵の落馬とのため　もはや人心地なき三郎高德は　松崎彦四郎範孝が兩肩に擔はれ　夫人櫻姫　和田四郎範家が護衛を以て　わずかに阿彌陀寺の山門によろめき著いたと見るより備後守　わが身の深傷を忘れて膝に抱き取り　涙を拂つて武者聲高く

「痴れ者奴　かばかりの小傷に弱り果て　此處に名もない野武士ごもに　死首攝かる〳〵ことやはある。その兩眼さつと見開け。」

高德やうやく　息吹き反して

「父上　父上。」

「お〳〵　脇屋殿　大江田殿　みな無事おはす。生きてふた〳〵び御用申せ。」

「櫻　櫻。」

姫が跪いて寄り添ふや　今日まで膚の御守として　矢石在亡の束の間も　肯つて放たざりし御寶を取り出し　垂れたる白百合の姫が首に

「去んぬる年　院の莊の行在にて　下し賜はりし一卷の御寶。姫　姫は迅く落ち延びよ。いざ　父上　心に殘ることもなし。死出の御供仕る。殿原我を　我をば馬に舁き乘せよ　今一戰に賊兵原を追ひ拂はうぞ。」

「お〳〵　三郎は死なじ。討死はまだ早し　御奉公はこれからぞ。老僧お賴み申さうぞ。」

「さて〳〵　立派な方々のお志。三郎殿をば地藏堂へ匿まひ申さうずるぞ。」

四

赤松勢の大將字野彌左衛門重氏　數多の雜兵引き具して　阿彌陀寺の山門に跳り込み

「兒島三郎高德　ならびに父備後守範長　この山寺に逃げ入りたるに相違なし　搦め取つて高名せよや。」

雜兵ごもは聲に應じて　泉林といはず　方丈といはず　あらん限りの破壞に狼籍を極め　すでに火を放たんとする時　本堂の中より太刀を杖つき　備後守は名乘つて出た。

「おゝ　範長はこゝにこそ　自らこの腹切り裁いて　未代までの手本にとも思うたが　欲しくば息あるこの吾が首　及にかけて取つて見よ。」

「やあ　備後　武士の情ぢや　潔よく降人に參れ　赤松殿に申し請うて　命のほどは助け得させ　勳功次第恩賞もあらうぞ。」

範長から〳〵と高く笑ひ

一範長これまで　聞きしことなき降參呼はり。言ふもの笑止や。卑怯千萬。汝が大將と仰ぐ逆賊尊氏　幾十通の教書とやらで　恩賞知行を懸けて來たが　目に見るだにも穢はしく　殘らず燒いて捨てたる範長　貪慾破戒の赤松法師に　降人なごとは　耳の汚濁。」

たちまち見はるゝ修羅の爭鬪。範長　範孝　接戰利あらず　バタ〳〵と仆れ伏す。

勢づいた重氏　地藏堂の扉を破れば　一閃の白光稻妻となつて直射し　雜兵ど
もばた〳〵地に倒れ　大雷大雨　天地晦冥　山門の內外瀧となつて水勢流る。
たゞ見る　堂中の櫻姫　彼の御寶を高く奉げて　舅父範長が屍の前に　跪き　悽
慘の景中　たゞ一人　美しきその生あるを。

◆……

4　古海の草庵……志純法師

一

漾々として流るゝ利根川に臨み　此處は下野の國古海の村　しばらく兵馬の馳逐
を免れて　穢つた野には犬も吠き　煙立つ家には雞歌ふ。

正平もはや十五年の秋のなかば　空晴れ渡つたある日の午後。
近い小舟の渡津を越えて　急がぬ旅の足も遲く　童裝束の女房は京あたりの人
男は奴鳥帽子の道行衣　主從と見ゆる二人づれ　丈より高い花薄の細道を　柔な日
に照されて現はれたり　語りながらもまた隱れたり　蜿蜒十里涯しない堤に登り
歲のひゞき爽な里の畦を傳ひ　やうやく村のはづれに著くと　通り合せた女の童
男の童　三四人の行くを捉へ
「もし〳〵　其處の子供達　此處は古海と申す莊な。」
草紙手本なぞ　手に手に持つ童等は集つて來て
「さうよ。」
「さうよ。」

「古海よ。」

「善い子達ぢや　然うあればこの古海に　志純様と申さるゝ法師様がどさらうか。」

「志純様　志純様は私等のお師匠様。」

従者の顔にはにはかに喜悅の色が榮えて　そつと主人を仰ぎ見ると　市女笠の奥深い美しい眼はいき〳〵と輝く。

「その志純法師様は何處にどざらうか　お館は何處だらう。」

「あの森の中のお地藏様よ。あの人達はみな　そのお地藏様に參詣の人。」

もう　此處から呼べばすぐに應へもしさうな常磐樹の森に　五六の參詣人が往來する。

「ごをれ　そのお手本　見せてくれまいか。やれ〳〵　見事など筆法ぢや　千字文とあつて　梁の員外散騎侍郎周興嗣次韻　天地玄黄　宇宙洪荒　日月盈昃　辰宿列張。いかにも〳〵　お若い時から學問好であつたが　近頃ます〳〵ど筆蹟が老巧となられて參つたやうぢや。疑もないお館様。勿體なや勿體なや。新田殿の配下から選ばれて　叡山の學問僧へ　立派な軍狀書かれたゞけ　文道武道の達人におはす。子供達　異なことを聞き申すやうぢやが　お師匠様のお首筋のこの邊に　お藏の痕はあるまいか。」

「あるよ　こゝのあたりに。」

「や　かたじけないぞ。」

市女笠の女房は　推し戴いてゐた手本をその子供に　從者は腰の巾著から　孔錢

二三文づゝを幼い子供の手に握らせておいて　さて　やゝ急いで森の方へ。

二

一叢の竹の林　杉の森松の森。引き寄せて結びし草庵の生垣の外に　笠をばその手に脱ぎしは櫻姫　歳華十餘年箭のごとく流れ去つて　もう三十いくつを算うべきに　みごりの髪長く　青やかな　黛匂ます〳〵濃なり。

「もの　おん願ぎ申す。」

く　く　と　呼び交して　一抱もあらう技垂櫻の幹の下に　遊びながら餌をあさる鳩　四羽五羽人に馴れて　狭き庵中に答うる人もなし。

やゝ聲を上げて

「旅の女。ご庵主さまに　もの　おん願ぎ申す。」

やがて　をう　と答へて見はれしは　紛うべくもない　良人三郎高徳。奔命戰爭ごと〳〵く利あらず　盡忠奉公の疲勞に痩せて　ありしに變る貧僧の姿　ひとりさに老ひんとす。

麻の法衣に　白布の首巻つくろひながら

「誰の人かは存じ申さぬが　今年は寒さことのほか早う訪れ申して　貧道　少し咳の心地　今三里に炙を据え申したところ。お茶一服まゐらすべきやうもなし　ご用何おはさうか。」

從者なる四郎和田範家　花より紅き紅葉の木蔭に　伏し　跪きてまず泣く。

「これは旅の女。はからず靜なおん庵を騒せ申す。一人の從者に導かれ都より野

州に參らうもの　世良田の莊はこの方にて　生品明神樣へはごう參ればよきか
くはしく敎へたまはりますやう。」
「世良田と申さるゝか。その利根川の堤を上の方へ　上の方へ　およそ道の程三
里ばかり　生品明神樣はその世良田で尋ねらるゝやうに。」
「新田殿　その世良田におはしませうか。」
「新田。新田。新田殿とは。」
「左中將義貞朝臣。」
「義貞朝臣は去んぬる延元三年閏七月二日　越前國燈明寺畷において討死。今は
この世におはし申さぬ。」
「さあらば　朝臣のご舍弟　脇屋左衛門佐義助殿おはしませうか。」

「脇屋殿。脇屋殿は去んぬる興國三年五月四日　伊豫の國府にて身亡られ申して
これも今はこの世におはさぬ。」
「さあらば　佐殿子息　義治殿　おはしませうか。」
志純法師の顏色は　にはかにさつと青褪めて
「義治殿とやら　存じまさぬ。左中將朝臣も　左衛門佐殿も　然うあつた　さう
なと　うけたまはり及ぶまでのこと。貧道は法師。軍のことなご存じ申さぬ。」
「お知りあらせられませぬとや。然あらば　これから　生品明神樣へお參いたし
ませう。かなたの遠い〳〵お山の方へ。」
姫が指す美しい手の末を　遙々と眺めた法師は　やゝおちつきの姿　冠木の門に
倚りながら

「あのお山は　遠い上野の國赤城山。世良田は　つひ　この川上　日暮までには
お著きあらうぞ。」
「生品の明神樣は　新田朝臣元弘のむかし　まづ御軍の旗擧げられました靈驗の
神樣よとうけたまはり申す　お知りあらせられませうか。」
「いや　貧道　存じ申さぬ　新田殿なご存じ申さぬ。」
「然あらば赤城のとなた　川の左手に一際高きは。」
「同じ上野の榛名山。」
「樣名に續く青雲の外なるは。」
「信州　淺間。淺間の左手に霞むは甲州の身延。」
「都　中國には見もならはぬ珍しき景色。次には信濃路へも參らばやとも存じま

するが　義治殿　信濃路にて　備前兒島の住人　三郎殿としばらくさすらはれま
したとかや。」
「またしても　新田殿とやらのこと　貧道つや〳〵知り申さず。」
「こは無禮げなることばかり　許させたまへよ。信心の女　ご庵主さまが仕うま
つれる　お地藏樣御名は　勿體なけれご　佐越地藏と仰せらるゝとうけたまはり
おまゐり許させたまうやう。」
「名もなき地藏尊　佐越樣とは仰せられませぬ。」
「いや　ご庵主さま。」
「存じ申さぬ。近頃奇怪千萬な旅の上蔣。いさ何處へなりともお行きやれ。」
法師　怫然として門内に入らうとするを　姫はしかと法衣の袖に寄り

「しばし。しばし。待たせたまへ。今日まで忘れは候はぬ　延元元年五月十九日
播州佐越の浦の戰に　父上備後守さまは討死。」
「存じ申さぬ。誰人のことか。」
「ご庵主さま　志純法師と申さるゝも實は備後三郎高徳殿　相違おはしまさぬ。」
「慮外千萬。志純はたゞの名もない法師。」
「今さらお名乘り申すまでもないこの櫻　僧形に姿を瘦させたまうそのご心中
そはたゞ上樣御爲と推し量りまゐらせ　何の爲にか　堅き一途のお心に　用なき
妨いたしませうぞ。佐越の御寺のお地藏樣に　殿も櫻も不思議な命を助けられ
やう〳〵負傷癒らせたまうや　すぐまたお軍。あの時父上備後守樣　三郎死なじ
高徳討死まだ早し　上樣御用はこれからぞと　仰せ遺された御敎もおはせば　よ

し十年二十年の歳月經たうとも　殿はかならずお命ながらへ　上樣御代知らし召
るゝまでは　戰勝利おはさずとも　新田殿ご一門とともに　何處かに潛み匿れて
も　御運の時節を待たせたまうことゝ　櫻は少しも疑ひはべらず。」
「さて〳〵　近頃面白いお物語　貧しい法師うけたまはり申して　涙禁めかね申
す。兒島殿とやら　三郎殿とやら　力山を拔き氣世を蓋ふほどの剛き武士か　そ
れとも勝利を知らぬ憶病武士か　櫻姫殿とやらのその心中を聞けば　定めてよろ
こび申さうぞ。貧道人ちがひ　寒う覺え申す。旅の上薦　何處なりともお行きや
れ。」
「何とて　かくは無情おはす。殿　櫻がかほごお慕ひ申して　十年この方お行方
の跡を追ひまゐらせしは二世の契を戀ひまゐらせうとての心よりも　一日も早く

お返しまゐせらうと　此御寶を。」
「笑止や　賛道に二世の契おぼえ申さぬ。」
振り放つて去らうとする三郎が前に　懐の御寶取り出して姫は
「然あらば　殿　むかし院の莊行在の一夜　三位の御局樣より拜領の御寶。佐越
の浦の戰に　殿の手づから　櫻が命にかけても守れと　仰せ下されましたこの御
寶。今日まで殿の御手に返しまゐらす時もなく　この御寶ございます爲に　十
年おん跡を慕ひ慕ひて。」
姫大聲を擧げて泣けば　三郎たちまち　巨木の一時に倒るゝ如く　大地に伏して
兩掌を合せ。
「今は何をか隱さうぞ　お事は姫　櫻　許せ　備後三郎兒島高德　今日ふたゝび

錦旗を拜す。」
今まで櫻の幹に隱れて　ならずば腕の力に問うても　主人三郎を曳ひ出さうとし
てゐた和田四郎範家　轟ぶが如く走り出で
「お館樣おんなつかしう。四郎　櫻さまお供仕り　遙々お尋ねいたしまゐる。」
「おゝ　四郎　三郎まつたく愧かしう思ふ。御代順はず　時に利あらず　今この
貧しい法師の姿　淺ましう思うか。」
「なか〳〵　お館樣　志士仁人のお魂　大義の爲に今日が日までの孤忠苦節
四郎このとほり拜み申す。」
「嬉しく思ふ。父上佐越に討死の後　三郎　新田殿の手に從ひ　越前越中からま
た京都へ　脇屋殿の手に在つては　上野下野に兵を起し　敗れてまた丹波高山寺

露光量違いの為重複撮影

城へ。義治殿を大將として　尊氏將軍を襲うて勝たず　王生に敗れて信濃に走り
正平七年攝州住吉の行在所より　今の上様勅を畏こみ　東諸國を奔つて甲斐なく
しはらく億形に身を隱したりとはいへ　まだ衰へたりとは心得ぬ高徳。勿體なけ
れど　上にしては　吉野に崩れさせたまへる上様　下にしては　討死せられし新
田脇屋の諸將　父上並に命を殞した郎從の後世を吊ひながら　今なほ奥州におは
す義治殿便を待つて　今一度と此處に忍んで時を待つぞ。卑怯者よと笑ふなよ。」
「お館様　そのおん後を其處に此處に　十年慕はせられての櫻様が　艱難流離の
甲斐おはし　錦旗ふたゝびおん手に還らせたまふ。四郎　これより　長く御供う
けたまはる。」
草庵暮れて燈影ほそく　半魂の月　高き櫻の梢にさびし……(完)

筆隨

ハンザケ村

1 ハンザケ精神
2 父の死
3 土豪本庄久光
4 古城山の頂より
5 草庵の曉色

露光量違いの為重複撮影

城へ。義治殿を大將として　曾氏將軍を襲うて勝たず　壬生に敗れて信濃に走り
正平七年攝州住吉の行在所より　今の上樣勅を畏こみ　東諸國を奔つて甲斐なく
しばらく億形に身を隱したりとはいへ　まだ衰へたりとは心得ぬ高德。勿體なけ
れど　上にしては　吉野に崩れさせたまへる上樣　下にしては　討死せられし新
田脇屋の諸將　父上並に命を殞した郎從の後世を吊ひながら　今なほ奥州におは
す義治殿便を待つて　今一度と此處に忍んで時を待つぞ。卑怯者よと笑ふなよ。」
「お館樣　そのおん後を其處に此處に　十年慕はせられての櫻樣が　艱難流離の
甲斐おはし　歸旗ふたゝびおん手に還らせたまふ。四郎　これより　長く御供う
けたまはる。」
草庵暮れて燈影ほそく　半魂の月　高き櫻の梢にさびし……（完）

隨筆

ハンザケ村

1 ハンザケ精神
2 父の死
3 土豪本庄久光
4 古城山の頂より
5 草庵の曉色

1 ハンザケ 精神

山椒魚　村の人はこれをハンザケと呼ぶ。

たとへば　敗れたる大スリッパを脱ぎ棄てたやうな彼の頭。その頭が　まづ見る人をして　無禮不遜の形貌たることを覺えしむる。もし　この醜き彼の怪頭が　小川のほとりの雜草中にでも見はれてゐたなら　多くの場合村人は　その携ふるところの鎌なり鍬なりを振ひ　手早き一擊を加へておいて　しかして後に彼を捕獲する

その極めて小さき二つの眼は　敗れたるスリッパの兩側に距離遠く　その前後四個の肢脚は　無禮不遜の頭骨と　便々たる倨傲の皷腹とに比べて　はなはだしく微弱に　その曳くところの長き尾は　柔かなる肉皮不恰好千萬に　しかも全體暗き茶褐

色の膚に　滑かなる粘液を汾泌することは　ます〳〵人の反感を買ふ。その陸上を歩むや　極めて鈍重に　傍若無人の態度を示し　その水中を泳ぐや　極めて悠々放縱無類の擧動を敢てし　しかも死を恐るゝの狀なく　妄に對敵動作に出づることもない。愚か　痴か　それとも我がハンザケ氏は　知者なるか　勇者なるか。

◇

知者なるか勇者なるか　彼についてこれを評論するだけの研究を有たないながら私は我がハンザケ氏を以て　少くとも　愚物であり痴物であるとは考へない。禮貌を以て身を文る者　必ずしも淑人君子にあらざるが如く　不遜の形容者を目して直に　慇懃なる心術なき者と斷じてはならない。敏捷は事を爲すに便利であら

うが　世には鈍重なるが故に　能く之を守るに適する職務もないではない。小川のほとりに茂る雜草中に潜む怪頭に　果して慇懃なる心術ありや否や　私はこれを知らない。又曾て彼が人に對してあつかましくも　正心誠意を標榜したことがあるとは聞かない。が　禮貌を以て少しも身を文ることを知らない彼に　嫉妬や　怨恨や便佞や　虚僞やのなきは事實であらう。たとひ　義を言はないにしても　小慧を行うなきも事實であらう。傍人なきがごとき鈍重の態度を保てばこそ彼はよく幾十年幾百年の天壽を樂しむを得れ。もし　巧利　小才　輕捷　敏活が彼の性であつたなら　その醜い形に　禍せられて　その一類は早く既に　族滅せられてゐたかも知れない。すなはち　赤き岩石の間に住むものは　その皮膚赤く　黑き溝渠に隱るゝものは　また黑き色に保護せられ　而して穴に潜み　叢に沒し　自ら重を持して動く

こと稀に　漁らずして來る餌を喰ふ。その小さき眼に觸るゝ泥鰌　小蟹　蛙なぞ彼は決して遁すことなく　スリツパの敗れたる巨口たちまち開けば　電光石火の早業　たゞ一と呑みに呑んで　これを便々の皺腹に送る。斯くして醜き鈍性も　彼の爲には　はなはだ幸福であるといはねばならぬ。

◇

外に死を恐るゝの狀なきは　内に何等の害心をも包藏することなきがためであらう。他に對して害心なく　したがつて死を恐るゝことなき生活は　我等人生にありては　まことに尊ふべき常住安心の境地ではないか。その形の醜きために　見つかりしだい　鎌なり鍬なりの災難を蒙ることは　ハンザケ氏に取りては　迷惑この上もない大事件たることを思へば　私は切に　村の百姓衆に對して　彼に對う同情の

今後大に深甚ならんことを希望する。

村の或る一青年は　私に答へていふ。吾等は彼の醜き形を好まざるよりも　寧ろ降らなる彼の剛愎を惡むと。いかにも　我がハンザケ氏の剛愎は　決して心易きものではない。もし　一度怒つてその巨口を開き　しかと敵物に對して嚙みつかんかその鋭き　鋸狀の齒の力が　上下のあごに續かん限り　太い棍棒の端であらうと丈夫な繩の筋であらうと　折檻强問の度が劇しければ劇しきだけ　ます〳〵强くます〳〵固く　死に至るまで決してこれを放つことはない。彼を捕へたことのある村人は　彼を生ながら苞につゝみ　藁を覆ふてこれに火を放つと　一時に燃え上る炎の中より　急がず騒がず　從容として匍匐ひ出ることを以て　實驗上の笑ひ話として相傳へる。

鳥の將に死なんとする時の聲のやうに　哀しき悲鳴をあげることは　世の同情を買ひ易き手段である。この買ひ易き手段を以て　賣り易き同情を求めんと欲する者は　自己の身に下る利害のためには　悲しからず　苦しからざるにもかゝはらず　つとめて哀しき聲色を裝ふ。が　我がハンザケ氏は　死に之くまで矢つてこれを爲さず　獨　その生存上の防術に任じて力を盡し　一身なほ且猛火の中をも厭はない剛愎もこゝに至つては　なか〳〵に壯烈ではないか。私は更に　この或る一青年に對して說く。君　見よ　彼は濁れる水を好まず　谿間の小石も數へらるゝほど　青苔滑かな清水に棲み　而も自分自身を入るゝ穴は　潺々の流において殊に潔きを選び　愼んで他を犯すことはない。すでに敵心なく害心なくして　その安住に追られその生命を脅さるゝに及び　こゝに死力を以て正しき攻防を爭うことは　これ

すなはち　天の命ではあるまいか。性に率う所以ではあるまいか。私はこれを以て彼の守るべきハンザケ道と信ずる。君　彼の不快なる形態を好まざるよりも　寧ろ大に彼の剛愎を惡むは何の故ぞ　と。

2　父の死

私は今　私の故鄕ハンザケ村に歸つてゐる。今年三月の末　八十七歳の天壽を以て世を逝きし父をかなしみ　滿中陰たる七七日追善法會を營まんがために。

私が在勤の大阪毎日新聞社より得たる二週間の請暇中　心ばかりの法會ははり且父の遺產を整理し　而してなほ餘日あらば　前を流るゝ細き谷川を索めて我がハンザケ氏に對して敬意を呈し　且二三鄕土の史蹟をも訪問したしと志してゐたが

たま〳〵　私として曾て經驗したことなき胃腸の疾患に冒され　佛筵の燒香すらも戴かず　請暇の二週間はとく過ぎて　すでに　三十餘日の間臥牀のまゝ　ハンザケ氏をも訪ひ得ず　史蹟をも尋ね得ず　いたづらに春夜の長きを歎じ　空しく遲日の暮るゝを惜んでは　詩書の耽讀に悒悶の心を忘れやうとしてゐる。

父の遺產は　まことに僅少なものであつた。公租の負擔は一百圓に過ぎず　穫るところの豆殼十餘石のみ。あゝ　父はその長い一生を　この貧乏に安んじて終つたのである。が　家あり　倉あり　田あり　畠あり　また　薪を採り材木を伐るべき山林あり　一錢銅の負債なくして　反つて預金の通帳を藏してゐた。孟子の所謂五畝の宅といふのであらう。春は櫻の花咲き　夏は桑の技茂り　秋は多くの柿が熟する。その五十のころは　はたらき盛で帛なごその身に衣たことはないであらうが

七十以降　たゞ　天命を樂しみ　佛を信じ「いざさらば　不老の國へ　春の雪」と辭世を殘して永く逝きゝ。

今　病牀に在りて父の死を思ふ。父は頗るハンザケ性の男であつた。父ばかりでなく　戰國時代の土豪高橋大九郎久光も　本庄越中守經光も　ハンザケ性の男であつたと思はれる。いな　村人の大部分　ハンザケ性を帶びざるはないであらう。

◇

まづ　その容貌の無禮不遜なりしことにおいて。野人もとより禮に嫻はざりしとはいひながら　言語も　動作も　決して鄭重なるものではなく　父は近處の松ウさんをも三郎さんをも　大抵呼び捨にして構はなかつた。

身長五尺四寸　骨格頑丈に皷腹便々。その鈍重の質は　態度傍若無人ともいはれたであらう。更にその剛愎なりしことにおいて。父は　何十年の昔から　その死の近づきし日まで　變ることなく私に誨へてゐた　曰く　眞直なる道を眞直に歩めば如何なるものをも恐るゝには足らない　と。その眞直なる歩が　眞直なる道に在りと信じた時には　ハンザケ氏がその巨口を開いて　嚙みつきたる敵物を放つことのないのと同じく　敢てその守操を曲ぐることはなかつた。村會議員であり　區長であり　組合道路の議員であり　學務委員　氏子總代　信徒總代。共有金の管理人にも選ばれ　入會山林の世話係をも勤め　村の百姓衆から　をぢさん〳〵と敬はれおぢいさん〳〵と尊ばれた。貧しけれども利を葵らず　不遜なれども小慧を行はず花を愛し　接木を好み　猿月と號して俳句を作り　呉越軍記　漢楚軍談　三國史等

はその最も愛讀した書であつて　唐詩選と孟子との章句を暗誦し　我が國の軍記軍談は　その大部分を讀んでゐたらしく　私は時々　これらの知識から出て來る父の奇問に襲撃せられ　何とも明確な返答を卽座に述べかねて「それが分らないで　大きな顔をするな」と　叱られもした。毎日讀み了つた新聞紙は　また一々故の如く帶封をかけて棚に納め　半紙竪折の帳面を綴つて　いろは別の字書を作り「ヒンデンブルグ＝獨逸の陸軍大將なり」「プリンスオブウエールス＝英國の皇太子殿下」「パルチザン　ニコライエフスクにて日本人を虐殺したる賊　黄巾の賊の如し」等叮寧に記し　暇ある時はこれを復習し　意外の人を意外に驚かしたこともある。

◇

ハンザケ氏が　水質清き谿谷の上流に穴を求め　その性に率つて分を超えざるが如く　父は貧しい五畝の宅に安住して　何等の禮貌をも文ることなく　三月二十二日の黎明　長かつた天壽を全うし終つた。

その晩年　年に一度づゝ大阪から歸つて省る私を迎へて「餓えず　寒えず　借錢なし　乃公ほど幸福な入り日を有つ者はなからう」と　くりかへしてゐた。その病篤きや　常に苦しんでゐた喘息の障もなくなり　穏なる呼吸すや〳〵と　日夜たゞ睡眠を嗜み　覺むればすなはち怠げな眼を開いて　看護の人々を眺め　ある時は微笑を浮べ「ことの外眠たく候　當年寒中には往生の本懷を遂ぐべきものか」と　蓮

如上人のご文章を誦して私達を笑はせ　又ある時は「伯夷叔齊は孤竹君の二子なりとあるが　孤竹の國は何處だ」と問ふ　私がその　最近張作霖氏と吳佩孚氏と相戰ひたる今の山海關の西方　南は渤海　北は熱河の一地方で　といふと「それなら其通りを帳面に書いておけ」と命じ　死の前々日には「天勾踐を空しうすること莫れ」と獨り言し　私と　私の弟と　從弟の一人とに對し　父祖の餘澤を以て人に驕るなと說き　境界を尊重して山林を愛護せよとの　誡を與へたる外　何等の遺言もなくす〳〵むるほどの食餌は　うましうましと賞美してこと〳〵く食ひ　醫藥もまた柔順に　一滴も殘さずしてその　盃を白髮の頭に戴き　苦しきやと問へば　否と答へ眠たきやとたゞせば　然と頷き　無我無慾　ハンザケ道に背くことなく　遂に　歸すべき天命に歸した。

村の講中　戸主會　青年團　婦人會　さうした人々の會葬ははなはだ懇切であつた。親族朋友の弔問ははなはだ親切であつた。父が常に呼び捨てにしてゐた松ウさんは　落膽のあまりに氣絶して倒れた。家のうしろの古城山の峰續き　朝の日の光浴く　松柏茂る森の中　新に奠めた墳塚の前に「ようこそ　ようこそ　ながいきしてくれました」と　孝行なごした記臆のない私は　その時々　來年の春は歸つて來て　きつと家のお世話をしませうだの　この秋はかならず戻つて參りますだのと老ひたる父に大嘘を吐いて　それで慰めやうとしたことなごのお詫もせず　長生のお禮をのみ申し上げて　涙を拂ふ。

　　曉靄園谿擁草庵　　枯蓬一徑露濃涵
　　老仙眠覺日升樹　　殘果墜庭更兩三

　　綠葉蓁々蔽古廬　　古廬閒寂訪人疎
　　今朝雨霽忘文籍　　老父迎吾摘菜蔬

3　土豪久光

ハンザケ村　今の行政村名は田所　むかしは上出羽といひ　近江三井寺すなはち園城寺の所領であつたこともあるさうな。足利の末期　十代將軍義植京都を逐はれて　越前に奔り周防に亡げ　世は應仁亂後の暗黑を承け　群雄四方に割據して　戰鬪一日も竭むことなかつたころ　高橋大九郎久光なる一豪傑が　出羽城主として威力をこの地方一帶に振つてゐたことは事實であるらしい。

當時　周防に大內氏あり　出雲に尼子氏あり　中間に位する石見安藝地方　西部

は前者の勢力に伏し　東部は後者に支配せられ　その勢力の消長するところ　群小諸將の背叛掌を翻すが如く　安寧秩序は全く破壞し盡されたものであつた。大九郎　出羽一萬六千貫の一將として　三歲犢の毛の數ほどの兵力を蓄へ　恰も我がハンザケ氏が　小蟹や泥鰌を喰うが如く　しば〳〵四境を脅かしてゐた。彼よりすれば其外孫　丹比猿掛の少輔次郎元就の如き　食邑わづかに七十五貫　士卒三百の小勢力は　愛すべき一青年くらゐに見えたであらう。陰陽山脈の三坂峠一つを越えて相隣せる安藝國大朝新庄の豪族吉川氏との構難連年決せず　遂に山縣郡有田城の爭奪戰となり　元就出世戰を誘う原因をも作つた。吉川氏は藤原南家の流　經基は應仁の亂に於いて細川勝元に與し　その驍勇を稱へられては鬼吉川と呼ばれ　その滿身の創痍を恐れられては　俎吉川と傳へられた俊傑。しかも大九郎のハンザケ性

は　この强敵に對して敢て畏怖するところもなかつたらしい。後安藝の靑屋城を攻めて三吉氏と戰ひ　城を奪つて反つてその首級を授け　出羽城また元就の有に歸した　彼が我がハンザケ氏の性を失はず　率直己を文らず　剛愎不遜を以て　愎剛不遜に死したることに對し　私は深い敬意を有つ。

4　古城山の頂より

境界を尊重して山林を愛護せよ　との遺命をかしこみ　一七日の前日弟を携へてうしろの山を見に行く。松　杉　檜などの老幹幼木を雜へた森に　樅や楢やの巨樹栗　樫の雜木林は　幾十年の春秋　父の親しみ厚かりしところ　樂しみ深かりしところと　今更ながら　涙ならざるはなく　遂に相携へて　古城址だと傳ふる本庄

山の絶頂にまで攀ぢ登る。

石州南端の僻遠　陰陽亂山の中隙　右の方遙に　残雪なほ斑に白きは　安藝の天邊に峙つ神曳山　左の空遠く　連嶺おぼろにかすかなるは藝石境上栗屋峠。神曳山の麓はすなはち吉川經基の幡居せし大朝新庄　栗屋峠を彼方に越ゆれば　たゞちに毛利元就崛起の吉田　丹比。そのむかし高橋大九郎久光が據つて以て　剛愎不遜の武を振つたものだと信ずべき出羽城址は　今私達の立つ背面に近く　呼べば山彦も應ふべく　峰を並べて二ツ山と名づけれ　崔嵬の雄姿を示して居る。この眼前に展開せらるゝ形勝から言つたなら　すでに大九郎戰死して　出羽城は元就の有に歸し吉川氏は經基の曾孫興經に至つて嫡系亡び　元就の子元春の襲ぐところとなり　中國の雄闘主として毛利尼子の對立となつた時　永祿元年二月のころ　こゝに出羽大

合戰の開かれたのは　兩雄興亡の形勢　まさに然あるべき地理だと私は疑はない。陰德太平記の記すところに依れば　毛利軍は大將治部少輔元春　一千餘騎　出羽元實三百餘騎　福屋式部大輔隆兼一千五百餘騎　杉原播磨守盛重八百餘騎。これに對する石州軍は　本庄越中守常光　小笠原彈正少弼長雄を盟主とする八千餘騎　而して　戰一日にして石州軍の大敗に終りきと。私は今こゝに　そのハンザケ性の最も强烈であつた本庄常光を評傳して　遂に　元就のために誘殺せられたる始終を語る暇なきを遺憾とする。

◇

あゝ　美しき村の眺望かな。限りなき丘巒波の如く起伏し　西より東に向つて縱

谷を作り　縱谷盡きてまた縱谷開き　田野遠迂　聚落散離　お寺と小學校とは村の大建築物であつて　鎭守八幡樣の森のみ鬱然として茂る。今日　日はじめて暖く時は午　一生父がお世話を燒き　またお世話を受けた麓の部落には　心地よい雞の聲が傳へられ　のごかな牛の牟々が聞え　谷間の細い草刈道には　となりの嫁ごが自慢の安來節がかすかな。我がハンザケ氏の鈍重性も　剛愎性も　その敗れスリッパの怪貌も　この山川自然の化育から來たものではあるまいか。一水帶の如く流る出羽川の上流　あの無數の谿谷より落つる細派もそれ〳〵の名を有つて　曰く小林川　曰く三阪川　曰く金谷川　曰く道明川　曰く亀谷川　曰く堂所川　皆ハンザケ氏隱棲の塲處でなきはなく　淸澄玉の如しと言つてもよいであらう。

鄕土自慢の父はつねに語つて居た。村の中部に峙つ高橋大九郎久光の二つ山　何

處から見ても同じ形に峰を竝べて　東の丸　本丸　西の丸　麓の丸　あれほど嶮しく　あれほど美しき城山がまたあらうぞ　二つ山はすなはち　山を重ねた「出」の字　しかもその形體軍雞の肉冠狀を爲す。この二つ山を中心の頭部として　勝利の時を歌ふ大軍鷄の右の「羽」は上出羽　中央は出羽　左の「羽」は下出羽　これに續く鄕川沿岸の一地帶は口羽村だと。附會はすなはち附會であらうが　展望上の地形は然うも頷かれる。

私は今　この高い本庄山の絕頂に蹈り　大きな聲を叫んで　美しい我が村の百姓衆に傳言したい一事がある。

生物學上から見たハンザケ氏が　果して進化の程中にあるものか　それとも　漸次衰亡の運命を辿りつゝあるものか　それが私に分らないが如く　今私の一睥下に

あるこの美しい郷土が　果して文明の光榮に向つて進歩しつゝあるか　それとも
私達の氣づかない間に　衰頽の方向に傾きつゝあるかを知らない。
何萬年かの以前　もし我がハンザケ氏が　今のあの鰐や鱶やのやうに　波濤荒き
海中にも住み　且　叢林深き地上にも倘ひ　縱横の威力を水陸兩方面に　恣にして
ゐたものだとするならば　今　百姓衆の鎌鍬に撲り殺されなくてはならぬ現狀が
ハンザケ氏自身にとりては　實に悲慘の極だといはねばならぬ。
今見る通り　小學校もお寺も完備して居る　聚落のごの家も貧しさうではない。
幅員廣い道路は既に築造せられ　まことに以つてお粗末ではあるが自動車が駛り
はなはだ以て光力薄弱ではあるが電燈が點ぜられ　形體大いに進歩繁榮の色澤がう
るはしいには相違ないが　純農村である地方一帶　何處に美しい森が殘つてゐる

何處に大きな林が育てられてゐる。收めらるゝ米なり豆なりに　ごれほごの改良化
育が施されて居る。勿體ない申分ではあるが　父が三度の食事毎に　まづ白髮の頭
の上に戴いておいて　然る後に箸を執つた飯と　私が大阪においてありがたいとも
思はず　朝夕喰べる飯とを比べたなら　玉と瓦との位が違ふ。今なほ私達の記憶に
殘る三十年前　漸々として茂つて居た麥の秀やうは　今は路傍に衰殘の形となつて
居るといつてもよい。
大きな馬鈴薯　見事な葱　そうしたものが十五里を隔てた廣島から輸送せられて
反つて私達の食膳に上らざるを得ざるやうになつたのはごうした事か。地方の女學
校を出た娘さん達が競うて都會に出で　お嬢さん方の眞似がしたくなつたり農學校
を出た青年等が　小學校の先生にでもなりたいのはごうしたことか。勝利を告ぐる

出羽古城址の兩翼は　軍鷄の姿勢舊態のまゝ勇しきも　聞けば借錢のない家とては
そこら邊に極めて稀であるさうな。時に利のない爲なのか　人に勤儉の精神が乏し
くなつて來た爲なのか　それともまた　私の見方が間違つてゐるのか。谿谷のハン
ザケ氏に對して深い敬意を有し　且その同族の繁榮を希うと共に　私は鄕土の百姓
衆に對して衷心の尊敬と　聚落の富强とを祈つて止まない。
これがこの　本庄山上からの　私の傳言である。
翌日私は大阪に　弟は福岡に　恙なかれよと互に別れて　おの〳〵歸つた。

5　草庵の曉色

今ふたゝび歸つて　父の七七日忌日はすでに過ぎた。請暇の二週日もまた空しく

去つた。而して私の病はなほ癒えない。ふと　目が覺めた。
村の遠い方から　鷄の聲が幽かに聞える。
夜はまだ明けさうにもない。きのふ盡日の雨に眠らんと欲して　情憶反つて燃ゆ
るが如く　今宵また吾が半生の綿想に疲れて　詩愁勝へがたきものもあつたが。し
ばらく安らかにまどろんだのであらう。
泥棒のおそれ少しもない山中の一軒家　板戸を鎖す警戒もいらず　そのまゝ古障
子を　しづかに開いて緣側に出る。柱の時計は　穏かに五時。
眞綿のやうな曉の霧が　全くこの狹い天地を藏ふて　岡をも谷をも　田をも
畠をも　たゞ眞白の一色に包んで小徑のほとりに立つ一本の若い杉のみが　薄墨の
繪となつて　目に留まり　晝夜を舍てざる小川の流に　爽かな淙々のひゞきのみが

耳に殘る。何として心地よい朝だらう　何としてなつかしい朝だらう

少小離國老大回　鄉音無改鬢毛摧
兒童相見不相識　笑問客從何處來

とは飲中歌仙知章の詩だと聞く。知章もまたその鄉里會稽のほとりに歸つて　斯うもあつたであらう　やはり土音を其まゝ　近處の知らない子供を見るも嬉しく　十年　二十年　の故舊と相見て　互に鬢毛の白からんとするを笑ふも樂しく　病みたればこそ　故鄉の情趣はひとしほ深きに　なほこの濃霧の曉色に涵つては　飾る錦のない身の幸福がこの上もなくありがたく　涙おのづから溢れて　父こひしさに限りもなし。

病子聽春雨欲眠　欲眠情憶却如然

故山鶯老花已落　半生回望一霧煙。

◇

昨夜　夜深く　うしろの山の梟が鳴いた「のりつけ　ほうさう」と。前の丘に杜鵑が叫んだ。「こつとい　かけたか」と。亡き父の遺した安らけきこの山中の一貧家　霧やうやく霽れて　黎明の微光がとゝのひ初めると　露しつとりと重さうな梨の花が　庭のしげりに浮び出る。谷間の小田は水肥えて　苗はきのふに勝りて青く　麥の畠　麻の畠　生々たる綠が加はつて來て　いつとはなく　ほの〴〵の明け色となるや　今まで薄墨の繪であつた杉の頂に　頬白の聲が起る「一筆啓上仕る」と。間もなく　梟の山にも杜鵑の丘にも　彼等の友が爭うて囀る。頬白の歌に曰く

「ちんちろ辨慶皿持て來い」「皿持て來たなら汁吸はせう。」と　續いて遙に山雀が歌ふ「びい　びい　ぽん　びいぽん　びい〳〵」と。頻白は政談演說の辯士の如く山雀はわかき舞姫のやさしさを有つ。

今日は晴れて　よき天氣であるらしい。石藝境上の山鄕　春來ること遲く　父が亡くなつた三月も　二十二日といふに　軒近き梅も　蕾を含むこと固かつたが　七七日の中陰去つて　花は地に落ち　山やうやく靑からんとするこの朝　明澄の大氣に懷かれて　淸嵐新煙おもふがまゝにこれを領すれば　六月上旬芒種節後　久しく惱んだ病子にはかに心地よきを覺えて　そゞろに近い小徑を歩んで見る。

政談子の快辯に雜つて　物置部屋の庇から　ふくれた雀の放つ彌次をかしに勝へず　舞姫のやさしき姿は　父のつぎ木した柿の技より技へ　今は靑葉の櫻のしげり

へ。つづいて來る訪問の賓客は　古城山の嶺あたりから「月　日　星」の三光鳥「小さい木偶欲しいぞ」とも「虎　貧乏すな」とも聞え　鶯の「ほゝけきよ」は遙に遠い谷間に隱れ　縱橫自由の燕がおしやべりは　山から里へ　里から山へ。水道の水のみに慣れた習としては　筧から落ちて止まない天惠の勿體なさを思ひつゝ口を漱ぎ　顏を洗うと　柔かなお日樣が草屋根の棟に登つて　これらの咬々囀鳴もまた何時しか終りを告げてしまふ。

◇

ハンザケを捕ることを以て職業としてゐる村の某　曾て吉川基經の舊邑　安藝の新庄で大ハンザケを獲つたさうだ。五尺幾寸　齡知るべからず。何百圓とかを以て

九州の或る方に賣つたとか。私は遂に　ハンザケ氏に對して敬意を表する機會なくして　ふたゝび大阪に歸らなくてはならない。病の故とは申しながら　久しく勤務を怠りしことかな。

鏡に向つて　延びた髭を剃る。枯槁昔日の面影もない。大阪における友人中には「今日はとも」「お天氣だ」ともいはず　會へばすなはち「君　間違つてるな」と呼ぶものがある。今の私がこの衰へた顔を持つて歸つたなら　彼の友は　私の顔の間違つてゐるに驚くことであらう。

「左樣なら」と　私は自動車の上から言つた。さらば地下の父よ　村の人々よ美しきハンザケ村よ「來年の夏はまた歸つて來ませうぼごに」と　幾度かかへりみる後に　出羽城の山影が次第に遠ざかる。

ハンザケの黒燒は　心臟病にも胃腸病にも　効驗はなはだ著しく　殊に肺病婦人病には奇妙な治績を見はすさうだ。ほんとか　うそか　私の知らないところであるが　私を診てゐてくださつた前さんといふ村の若いお醫者さんはひそかにその藥物的研究を試みてゐられるとか聞く。成功せられるやうに。

—白也文庫第二編—

その夜（終）

白也文庫第一編

南朝山河の秋

定價 壹圓四拾錢
送料 八錢

四六判二百二十頁
布製函入美本

大阪在の一百姓南朝史蹟の巡拜を志し、近畿北陸東國山陰山陽の旅に幾十日の山河を跋渉しました。先笠置の行在所趾から江州三雲へ、番馬へ、越前金崎へ、杣山、鯖江淺水、福井、そして、新田左中將戰死の燈明寺畷へ。中將が一意王業の恢復に努められた心事と、その偉大なりし最後の戰闘を追懷しながら、茲にこの一書を得ました。

笠置寺の行在所　藤房卿の妙感寺　四百三十二士の墓
木目峠か荒茅か　落日孤城の金崎　杣山への途上
城下の大講演　淺水の内侍夫人　燈明寺畷の戰死
衣冠正しき遺像

大正十五年十二月二十日印刷
大正十五年十二月廿五日發行

その夜

定價壹圓四拾錢

不許複製

著者　小笠原白也
大阪市此花區上福島北一丁目三十七番地

發行者　小笠原白也
大阪市此花區上福島北一丁目百十番地

印刷者　森本宗吉

發賣所

大阪市此花區上福島北二丁目卅七　白也文庫
大阪市西區靱北通二丁目　盛文館
名古屋西區玉屋町　小澤百架堂
京都市二條寺町東入　伊藤博省堂
神戸市元町　川瀨日進堂
久留米市米屋町　菊竹金文堂
佐賀市　大坪書店

白也文庫第三編

南朝時雨の跡

近刊　山河の秋と同形

落日寒雨の史愁に耽りながら、南朝史跡巡拜の百姓は、越前より直に越後新潟へ、海を越いて佐渡へ、轉じて上野下野から鎌倉へ。時雨の跡の大要は、

法馬の國佐渡が島へ　奇異なる記傳　檀風城址と資朝卿
御火葬塲の松風　さゝやかなる黒木の御所址　元弘三年五月八日
足利學校の古聖像　兩崖山下の大日堂　鎌倉より丹波篠村へ
篠村八幡の旗立柳　八州平野の大展望　都より策略の使者
金山城址の新田神社　天莫空勾踐　美なる故山河の固
皃島高德隱栖の寺　利根河畔より鎌倉へ

517
615

終